

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第21回 「一式飾り」のバトンをつなぐ
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-11-07
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6248

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部教授 高橋 健司

第21回

オブジェを作り、16世紀の画家アルチンボルドも、野菜一式を人の顔に見立てた絵画を描くなど、「見立て」

はない。

「こつした「一式飾り」の尽きない魅力を、地域の子どもたちに伝えようと、各地の保存会や自治会、学校と連携して、「一式飾り」の学習に取り組んできた。

写真をご覧いただきたい。

これは2017年11月に鳥取の南部町立西伯小学校で行った「一式飾り」の授業の様子である。私が陶器一式の「龍」を提示し、研究室の学生が説明している。「龍」は連載の第3回で取り上げた、平田で学生たちと制作した作品である。この「龍」をもとに、出雲地方の陶器のカエルを用いた「見立て」の面白さを伝えている。

「法勝寺一式飾り」の地元西伯小学校で、「一式飾り」を学ぶ授業を始めて今年で5年。当初は「一式飾り」は地元にはかないと思ひ込み、希少性を誇るだけであった子どもたちが、出雲や北陸などにも「一式飾り」があることを知って視野が広がり、江戸時代から続く伝統に興味を示すようになった。

また、子どもたちは「一式飾り」の伝統の根本にある「見立て」の面白さを知って、自分たちでも容易にできることに気付き、身近にある学用品を見立てた作品作りを始めた。

こつして小学生が作った作品が、毎年4月の「さくらまつり」で飾られるようになり、地域の人たちの大きな励みになっている。子どもたちも祭りに参加することで、地域の一員としての自覚が芽生えている。

読者の皆さんは「一式飾り」を単なる遊びと思われなくてもいいが、それは年に一度の祭りのハレの日に、住民が協同して行う娯楽であり、地域の暮らしてに活力を生み出す、大切な行事である。

そんな豊かな生活文化が今も山陰の地に息づいている。地域で受け継がれてきた伝統が途絶えてしまわないよう、「一式飾り」のバトンを若い世代につなぐ活動を、今後も地域と連携しながら続けていきたい。

この8年間、私は「一式飾り」の調査と研究に明け暮れてきた。山陰のみならず、西は熊本から、東は富山まで、祭りのフィールドワークは80回を数え、目にした作品数は1000点を超えた。

一見子どもの遊びのような「一式飾り」や「造り物」は、江戸時代後半から昭和の初めにかけて日本各地で盛んに行われ、現在も昔ながらの形で続けている地域が20近くある。中には「奇祭」と呼ぶ地域もあるが、「一式飾り」は決して特異なものではなく、逆に時代や地域を超えた普遍性が見出せるのではないかと考えている。

各地の「一式飾り」には、素材などに地域的な特色が見られる一方で、「見立て」の趣向が通底し、それは世界にも通じる。連載の第11回で紹

「一式飾り」のバトンをつなぐ



介したように、ピカソは自転車を用了遊びや芸術は、人類共通の文化と言っても過言で